

# まえがき

本書の淵源は筆者が1987年に刊行した『命題の文法』に遡る。「日本語文法序説」という副題を冠したこの書は、第1部の標題「叙述の類型をめぐって」に示されるとおり、「叙述の類型」(「属性叙述」・「事象叙述」という概念に基づく現代日本語文法研究への第一歩であった。

本書は、『命題の文法』で打ち出した、叙述の類型の観点による現代日本語文法研究をさらに深化させることを目指したものである。思い起こせば、筆者が叙述の類型の観点を意識しはじめたのは大学院に在籍していた1975年頃のことであり、それ以来長い歳月が経過している。叙述の類型の問題を取り上げた『命題の文法』の刊行以後、折に触れてこのテーマについて考える機会があったが、本格的な再考に踏み切ったのは前著『日本語構文意味論』の上梓後のことである。

文法論が対象とする領域としては、語を対象とする「語論」、文を対象とする「文論」、談話・テキストを対象とする「談話・テキスト論」の3部門を設けることができるものと考えている。このうちの語論についてはレキシコン(語彙)の研究との関わりが、また談話・テキスト論については語用論の研究との関わりが深い。私見では、これら3部門の中心は文論にあり、文論を中心にその両側に語論と談話・テキスト論を配するという構図を思い描いている。

本書が考察の対象とする叙述の類型の研究(「叙述類型論」)は、文の形と意味の対応関係を明らかにしようとする文論の課題そのものであり、その意味において、文論の要をなすものと言ってよい。本書の書名を「日本語文論要綱」とし、また「叙述の類型の観点から」という副題を添えた理由はそこにある。

文論へのアプローチの観点として筆者が重視しているものに3つのもの

がある。1つは、文の意味的な構成に階層性を組み込む観点（「文の意味階層構造論」）、もう1つは、形と意味が結びついた構成体である「構文」（叙述構文）の意味の在り方を探る観点（「構文意味論」）、そしてもう1つが、文構成の背後にある叙述様式に目を向ける観点（「叙述類型論」）である。これらの観点から文論にアプローチしたものが『日本語モダリティ探究』、『日本語構文意味論』、そして本書『日本語文論要綱』である。

思えば、これら三部作の原点は、筆者が言語研究に出会った1970年からの10年間にある。学びの時期であったこの10年のあいだに課された宿題を本書により何とか提出し終えたと言えようか。もとより完成の域には辿り着けていないが、長く携わってきた日本語文法研究の一区切りとしての本書の刊行を感慨深く思う。

筆者の願いは、現代日本語を対象とする研究の成果を他言語の研究に向けて発信し、それらの研究とのあいだで課題を共有することである。『命題の文法』のなかで記した言い方では、「それ自体はローカルなフィールドを対象とする日本語研究が、言語研究に対していかなる貢献をなし得るかが、改めて問われなければならない」（p. 7）ということになる。筆者がなし得たことは僅かなものに過ぎないが、日本語から他言語への課題の提供と共有を目指す研究が今後多くの人の手によって進められることを心から願う次第である。

2021年2月20日 京都宇治にて  
益岡隆志

# 目次

まえがき	i
序章	1
<b>第1部 属性叙述をめぐって</b>	
第1章 属性叙述へのアプローチ	17
第2章 領域設定と二重主語	25
第3章 述語名詞におけるカテゴリー形成	39
第4章 拡大名詞文としてのノダ文	55
<b>第2部 事象叙述をめぐって</b>	
第1章 事象叙述へのアプローチ	73
第2章 日本語の受動文とその言語類型的特点	81
第3章 日本語の恩恵文——受益文を中心に——	99
第4章 日本語の存在型アスペクト形式	117
<b>第3部 主題と主語をめぐって</b>	
第1章 日本語の主題と主語	137
第2章 主題構文と主観性	153
第3章 主題構文としての名詞修飾節構文	171
第4章 ガの多機能性	187

目次

終章	205
補説 1 日本語叙述類型論の研究史	211
補説 2 日本語の主題と主語をめぐる研究史	227
補説 3 叙述の類型から見た文の意味階層構造	243
参考文献	255
索引	267
あとがき	271

---

# 序章

## 1. はじめに

文の形（構造）と意味の対応を考察する文論（sentence grammar）において、日本語からどのような研究課題を提起できるかというところを本書の出発点としたい。そこでは、日本語の観察をもとに、いかにして他言語と共有できる一般性の高い研究課題を見出していくかが問われる。

この観点からこれまでの日本語文論の研究状況を眺めるとき、提起されてきたいくつかの課題事例を挙げることができる。それを代表するのは、文構造をモデル化した南（1974, 1993）の研究である。文構造に4つの階層を認める南（1974, 1993）の研究は、「南モデル」という名で呼ばれるとおり、日本語の観察に基づいて構築された一般性の高い文構造論である（cf. 長谷川（2010））。

他言語との対照研究において大きな成果を取めている他の事例として主題・主語の研究、名詞修飾構文の研究、動詞タイプの研究が挙げられる。主題・主語については、三上（1942, 1960, 1970）の主語否定論を契機として対照研究（さらには、言語類型論）の観点から活発な議論が続いている（cf. 柴谷（1989）、益岡（編）（2004））。名詞修飾構文についても、「内の関係」と「外の関係」の違いに着目した寺村（1975–1978）の分析を受けて、対照研

# 第1部

## 属性叙述をめぐって

---

# 第1章

## 属性叙述へのアプローチ

### 1. はじめに

序章で導入した2つの叙述の種類のうち、第1部では属性叙述を対象に考察を行う。属性叙述とは、モノ（人などを含む広義の存在 (entities)）を叙述することである。モノは種々の特徴・特性を備えて存在している。モノが備えている特徴・特性を本書では「属性」と呼ぶ。モノはそれが有する属性の違いによって互いに区別される。したがって、モノを叙述するとはモノが有する属性を叙述することに他ならない。属性叙述とは、対象となるモノを設定し、それについて属性を述べることである。

そのような属性叙述の様式を反映して、属性叙述を表す文は、(1)に示されるような、設定される対象を表す主題の部分と付与される属性を表す解説の部分からなる二部構造を形成する。例えば(2)の文の場合は、(3)のような構造を取ることになる。

- (1) [対象表示部分 (主題) + 属性表示部分 (解説)]
- (2) 日本は島国だ。
- (3) [日本は (対象表示部分 (主題)) + 島国だ (属性表示部分 (解説))]

第1部では、属性叙述へのアプローチとして3つの切り口を用意する。

## 第2章

# 領域設定と二重主語

### 1. はじめに

序章で述べたとおり、出来事の表現を対象とした事象叙述の研究はこれまで大きな成果を取ってきており、あたかも文の研究は事象叙述の研究に他ならないといった見方さえあるのではないかと思われる。事象叙述に対する関心の高さは、そこに格・ヴォイス・アスペクト・テンスといった数多くの興味深い研究課題が見出せることに由来する。それに対して属性叙述のほうは、その単純な構造特性のゆえに、事象叙述における格などに比定する文法カテゴリーを取り出すことが容易でなく、研究を推進するための観点が見出しがたかったものと思われる。そこで本章では、属性叙述の研究を進めていくための糸口として、属性叙述を特徴づける領域設定の問題を提出したいと思う。

領域設定というのは、所与の対象に属性を付与する際、属性の領域を設けることにより関係する属性の範囲を絞り込むことである。所与の対象が関わる属性の範囲が広大な場合——特に、対象が人の場合、関係する属性の候補は膨大なものとなる——、属性の領域を設定したうえで属性を付与するのが有効である。本章では、領域設定により属性叙述文にどのような構造特性がもたらされるかを考察したいと思う。併せて、その属性叙述文の構造特性が

## 第3章

# 述語名詞におけるカテゴリー形成

### 1. はじめに

本章を始めるに当たって、まずは叙述の類型に関わる要点を確認しておきたい。叙述の類型というのは、文の叙述様式に性格の異なる2つの類型が認められるとするものである。すなわち、1つは所与の対象が有する属性を叙述するものであり、もう1つは特定の時空間に出現する出来事を叙述するものである。これらの叙述様式の違いを属性叙述・事象叙述という名称で呼び分ける。この区別に関係して問われるべきは、「属性」という概念をいかに明確化していくかという点である。

属性の概念の明確化に取り組もうとするとき、属性叙述の働きを持つ文を代表すると考えられる、(1)のような名詞文(「AハBダ」)に目を向ける必要がある。

- (1) あの人は作家だ。

名詞文における属性叙述の在り方は、それに対応する古代語の名詞文「AハBナリ」の構成様式に顕現される。「AハBナリ」は「AハBニアリ」に由来するが、この「AハBニアリ」は対象AがBというカテゴリーに存在すること、すなわち、Bというカテゴリーに所属することを表している。

## 第4章

# 拡大名詞文としてのノダ文

### 1. はじめに

この部の第1章で、属性叙述を代表するのは「日本は島国だ」のような名詞文であるという見方を提出した。名詞を述語とする名詞文は基幹的な文類型であり、どの言語にも存在するはずのものであるが、第1章でも述べたように、日本語の言語类型的特徴として、名詞の性質を持つ形態が介在する文末形式(「名詞性文末形式」)が多数存在することが挙げられる。そのような文末形式を代表するのが「ノダ」である。文末に「ノダ」を取る文(以下、「ノダ文」)の研究は日本語研究のなかでは以前から田野村(1990)、野田(1997)をはじめとして詳細な検討が行われているが、これまでのところ益岡(1990, 2003b, 2013)を含め、個別言語の個別現象として扱われる傾向にあったことは否めない。

そこで本章では、日本語のノダ文の問題に対して、できるかぎり一般性の高い観点からのアプローチを試みたいと思う。具体的には、「コト拡張」という見方のもとで、ノダ文の意味をその構成的な意味と派生的な意味の関係に留意しつつ考察する。併せて、このノダ文の意味分析を他言語の類似文の研究に及ぼす可能性にも言及したい。

以下の本論の構成は次のとおりである。まず第2節で、「コト拡張」の見

## 第2部

# 事象叙述をめぐって

---

# 第1章

## 事象叙述へのアプローチ

### 1. はじめに

第2部では、事象叙述をめぐる問題を考察する。事象叙述とは、特定の時空間に出現するデキゴト（事象）を叙述するものであった。デキゴト（事象）とは、「出来事」という表記にあるとおり、時空間に“出来る”事態であり、また、観察（知覚）の対象となるものである。

そのような事象の性格を確認するために、「アル」と「スル」を述語とする表現を瞥見してみよう。まずアルの表現として、次の(1)と(2)を比べてみる。

- (1) あの人は作家である。
- (2) あそこにおもちゃがある。

(1)が所与の対象である「あの人」が有する属性を述べる属性叙述の表現であるのに対して、(2)は現場（発話の場）に出現・存在するデキゴトを叙述する事象叙述の表現である。(2)は所与の時空間に存在する事態であり、観察（知覚）の対象である。

次は、(3)～(5)のようなスル（「スル」・「シタ」・「シテイル」）の表現で

## 第2章

# 日本語の受動文とその言語類型的特質

### 1. はじめに

本章では、事象叙述文の中核をなす述語・項構造の在り方に関係する受動文を取り上げる。受動文は日本語を含む数多くの言語を対象に古くから研究が進められてきた。その長い研究史のなかから諸言語の受動文に認められる一般的特性と各言語に見られる個別的特徴が明らかになりつつある。本章は、そのような研究史に目を向けつつ、主観性に関わる日本語受動文の特質に焦点を当てて考察しようとするものである<sup>1</sup>。

初めに、日本語受動文の形式的・意味的特徴を確認しておこう。形式的特徴としては形態の面と統語の面が考えられるが、そのうちの形態の面については、述語動詞が「-ラレル」の付加された有標的形態を取るという点が挙げられる。また統語の面については、中心項である主語の交替が関わるといふ点が挙げられる。

それに対して意味の面については、能動文では行為が主語から発するのに対して、受動文では行為が主語に向かう——すなわち、主語が行為を受け

---

<sup>1</sup> 受動文は基本的に事象を叙述するが、場合によっては、事象を表す受動文が何らかの属性を含意することがある。そのような受動文を益岡(1982)では「属性叙述受動文」と呼んだ。本章では、属性叙述受動文の問題には立ち入らない。

## 第3章

# 日本語の恩恵文

## —受益文を中心に—

### 1. はじめに

前章の受動文の分析を踏まえて、本章では、日本語に特徴的であるとされる恩恵文に話題を転じたい。

日本語恩恵文の注目すべき特徴として、授受動詞「ヤル(アゲル)」・「クレル」・「モラウ」の活用という点、及び、ヤル(アゲル)とクレルの区別という点が挙げられる。授受動詞「ヤル(アゲル)」・「クレル」・「モラウ」の活用というのは、これらの動詞が機能語化(補助動詞化)して「～テヤル(アゲル)」・「～テクレル」・「～テモラウ」という3つの恩恵文が形成されることである。本章では、これらの恩恵文を「テヤル(アゲル)文」・「テクレル文」・「テモラウ文」と呼ぶことにする。もう1つのヤル(アゲル)とクレルの区別というのは、与え手を主語(中心項)とする動詞にヤル(アゲル)とクレルという2つの異なる動詞が用いられるという点である<sup>1</sup>。

この日本語恩恵文について、以下の本論では次のように議論を進めていく。まず第2節で、恩恵文に関する筆者のこれまでの研究を振り返る。それをもとに、第3節で恩恵文における意味の拡がりを詳説する。続く第4

---

1 恩恵文に関する諸言語の類型論的研究については、Zúñiga and Kittilä (eds.) (2010) を参照されたい。

## 第4章

# 日本語の存在型アスペクト形式

### 1. はじめに

繰り返し述べてきたとおり、事象は時空間に出現することから、事象叙述の表現には時間性が深く関与する。アスペクトとテンスがその時間性に関する文法カテゴリーであるが、事象叙述を代表する動詞の文においては、動詞の語彙的特徴に深い関わりを持つアスペクトの問題が特に重要な検討課題となる。

日本語のアスペクト研究には長い研究の歴史が認められるが、それが興隆の時期を迎えたのは1970年代のことであり、そのことを象徴するのが金田一(編)(1976)の刊行であった。日本語の動詞研究とアスペクト研究の深い繋がりに目を向けたこの金田一(編)(1976)の刊行を契機として、動詞に関わる形と意味のあいだの複雑な様相を追究するアスペクト研究が「アスペクト論」の名のもとに、多くの日本語文法研究者の関心と呼ぶ研究課題となっていたのである。

本章では、そのような“研究の宝庫”とも言えるアスペクトの問題をめぐって、日本語のアスペクト形式として重要な位置にある表現形式を対象に考察を試みる。具体的には、動詞の「存在型アスペクト形式」と呼ばれる「-ている」・「-てある」の形式(以下、「テイル形」・「テアル形」)を取り上げ、

## 第3部

# 主題と主語をめぐって

---

# 第1章

## 日本語の主題と主語

### 1. はじめに

日本国内で展開されてきた伝統的な日本語文法研究には、日本語の特徴を反映した興味深い研究テーマが多数存在する。そのなかの1つが主題 (topic)・主語 (subject) の問題である。文論の基本的な目標は、文がどのように構成されるか、そしてそのような構成が文の意味とどのように結びつくかを明らかにすることである。その文論の研究における重要課題の1つが文構成における主題と主語の位置づけの問題である。

日本語の文では、主題という文法概念と主語という文法概念が複雑な交渉を持つ。不変化詞 (助詞) 「ハ」と「ガ」の使い分けの問題は、この主題と主語のあいだの複雑な関係を体現するものである。その結果として、日本語文法の長い研究史のなかで、これらの文法概念をめぐる議論が絶えることなく続いている<sup>1</sup>。

一方、言語学の研究に目を向けると、主語・目的語などの文法関係 (grammatical relation) の研究が以前から話題を呼んでおり、文法関係全般を対象とする研究、そのなかの主語を対象とする研究、目的語を対象とする研

---

1 この点については補説2を参照されたい。

## 第2章

# 主題構文と主観性

### 1. はじめに

日本語の文論における最重要課題の1つが主題の研究である。主題の問題が重要課題として長く研究されてきたのは、言うまでもなく、不変化詞(助詞)「ハ」の文法的な性格を突き止めるのが困難であり、「ハ」と「ガ」の使い分けに対する説明が容易ならざることに因る<sup>1</sup>。本章は、「ハ」が文の主題を表示する代表的な形式(主題標識)であるという見方——これは従来の見方を受け継ぐものである——のもとで、日本語の主題の問題をめぐって叙述の類型の観点から考察しようとするものである。

本章の考察の出発点となるのは、主題が解説と組み合わさって「主題・解説」の二部構造を形成するという点である。主題は二部構造という全体枠(ゲシュタルト)のなかで機能する構成要素である。そこで本章では、主題を取る表現を「構文」(construction)として捉え、「主題構文」という名称を用いることにする。

既に繰り返し述べてきたとおり、主題構文が主題・解説という二部構造をなすという点には、所与の対象の属性を述べるという属性叙述の構成様式が

---

<sup>1</sup> 日本語の主題を扱った単行本は、近年刊行されたものに限っても堀口(1995)、野田(1996)、丹羽(2006)、堀川(2012)など多数に上る。

## 第3章

# 主題構文としての名詞修飾節構文

### 1. はじめに

日本語の名詞修飾節構文は、日本語の文論の研究において多大な成果を収めてきた研究課題である。特に注目されるのは、それが日本語の特徴に根ざした独自の発展を遂げてきたという点である。そのなかでも、とりわけ光彩を放つものとして寺村（1975–1978, 1980）の研究と Kuno（1973, 1976b）の研究が挙げられる。

寺村（1975–1978, 1980）の研究は、日本語の名詞修飾節構文を話題にするとき必ず引用される、道標とも言うべき位置を占めている。その最大の貢献は、多数の実例の観察に基づいて (1) a のような「内の関係」と (1) b のような「外の関係」の違いを説いたことである。

- (1) a サンマを焼く男
- b サンマを焼く匂い

a においては、修飾部の述語「焼く」と主名詞「男」とのあいだに「男が焼く」という格関係が成り立っている。他方 b においては、修飾部の述語「焼く」と主名詞「匂い」とのあいだにそうした格関係を見出すことはできない。寺村の実証的な研究により、日本語に広範な外の関係の名詞修飾節構

## 第4章

# ガの多機能性

### 1. はじめに

不変化詞「ハ」及び主題に関する問題を論じた前の2つの章を受けて、本章では不変化詞「ガ」に話題を転じて、ガが文構成においていかなる機能を果たすのかという問題をめぐって考察を試みる<sup>1</sup>。ガは一般には主格を表示する格標識 (case marker) として扱われるが、本章では叙述の種類の観点から、それとは多少異なる見方を提出する。この問題については益岡 (1987) の第1部で話題にしたところであるが、ここではその分析に手を加える形で新たな展開を図りたい。

本章の主たる目標は2点ある。1つは、事象叙述と属性叙述におけるガの表示 (以下、「ガ表示」) の重要な相違点を指摘すること、もう1つは、事象叙述・属性叙述に加え「指定叙述」を副次的な類型として認定したうえで、その叙述タイプにおけるガ表示の特質を明らかにすることである。指定叙述については益岡 (2000) の第4章であらましを述べるに留まっていたが、本章では、叙述の類型における指定叙述の位置づけについても考えてみたい。

---

1 語は一般に内容語 (content word) と機能語 (function word) に分けられるが、ガはハと同じく、機能語に属する。機能語については、その名のとおり、文構成においていかなる機能を果たすかが問われる。





## 補説 2

# 日本語の主題と主語をめぐる研究史

### 1. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の主題・主語に関する研究史を筆者の観点から整理して示すことである。

本稿の構成は以下の通りである。まず第2節で、研究史の展開の鍵を握ると考えられる松下と佐久間の研究を取り上げる。それをもとに第3節で、松下・佐久間以後の研究の流れを概観する。最後に第4節で、主題に関する機能的アプローチと認識的アプローチの関係という問題に的を絞って、その研究史の展開を私見を交えつつ整理してみたいと思う。

### 2. 松下と佐久間の研究

現代日本語の主題と主語をめぐる研究には非常に長い歴史があるが、その研究の流れのなかで、松下（1928）と佐久間（1941）が重要な鍵を握る研究として注目される。これら2つの研究は、現代日本語の主題・主語に関する研究の展開を考えるうえで極めて重要な位置にあると考えられる。以下、松下（1928）、佐久間（1941）の順に、そこで示された見方の要点を記すことにする。

# 叙述の類型から見た文の意味階層構造

## 1. はじめに

文論は文の形（構造）と意味がどのように対応するかを明らかにしようとするものであるが、その接近法の1つに、「意味的階層」(semantic layer) の概念を基盤として文の全体的構成を捉えようとするアプローチが考えられる。そのようなアプローチとして、筆者は益岡（1997, 2007）・Masuoka（2009）などで「文の意味階層構造」と称する文論のモデルを提案した。

文の意味階層構造に類する文構造の見方は、現代日本語の文法研究においては長い研究史を有しているが、そこでは、筆者の見方を含め、共通して1つの重要な観点が抜け落ちていたように思われる。それは、文の叙述の様式が階層構造の在り方を少なからず左右するという観点である。すなわち、文が事象を叙述する場合（事象叙述）と対象の属性を叙述する場合（属性叙述）とでは、その階層構造の在り方が異なりを見せるということである。そこで本稿では、叙述類型の在り方が文の意味階層構造にどう関与するかという問題を検討してみたいと思う。

この目標のもと、本稿は以下のように構成される。まず第2節で、文の意味階層構造に関するこれまでの研究の概要を筆者の見方（益岡1997, 2007, Masuoka 2009）を中心に整理して示す。続く第3節で、事象叙述文と